

研究あら・かると

## 現場に行かなきゃ分からないーカンボジア旅行記

大 嶋 英 一

### はじめに

皆さんはカンボジアをご存知だろうか？ カンボジアのことは知らなくてもアンコール・ワットのある国と言えば、ハハ〜ンという人も多いのではないだろうか。アンコール・ワットが建設された12~13世紀頃のカンボジアは、現在のタイやベトナム南部をも切り従えたインドシナ半島の大国だったのだ。2018年8月私はそのカンボジアに遂に足を踏み入れた。いかんせん初めての訪問であったので、少しカンボジアの勉強をしようと思っただけで本屋に向かったが、旅行案内書を除いてカンボジアのことを記述した本はほとんどなかった。中国や韓国・北朝鮮に関する本は腐る程並んでいるのに、東南アジアの国の本となると本当に数えるほどしかないのだ。同じアジアの国として恥ずかしくないのかなんぞと、自分が行くからやけに義憤を感じたりしたのだが、出版してもどうも売れないらしい。市場経済の弱いところだ。

さて、前置きが長くなったが、なぜカンボジアに行くことになったのかを説明しよう。この旅行は、「中国の南向政策」をテーマとする共同研究の一環としての研究旅行である。昨年ベトナムとラオスを訪問したときにも感じたことだが、今回のカンボジア訪問でも現地に行かないと本当のところは分からないと改めて痛感した次第である。

中国の南向政策とは、近年国力伸長の著しい中国が東南アジアや南シナ海など南に向かって影響力をとみに増大させていることについて、現地を見ながら考察しようという極めてタイムリーな企画なのである。私はかつて外務省で働いていた時から中国をずっとウォッチしてきたから一応中国の専門家といってよいだろうが、初のベトナム行きでは大国中国を日本以外の隣国から眺めるとどのように見えるのかということについて衝撃を受けた<sup>1)</sup>。今回のカンボジア行ではそれとは全く別の隣国像が垣間見えて一層衝撃的で、国と国の共生の難しさを今更ながらに感じたのであった。

### 1. カンボジア行きの飛行機の中で

我々が訪問する直前カンボジアでは5年ぶりの総選挙が行われ、日本でもかなり大きく報じられた。大きくとり上げられた理由は、政権与党の人民党 (CPP) が肉薄していた野党救

---

星槎大学共生科学部



写真1 プノンペン市内に溢れる人民党（CPP）の看板

国党（CNRP）を強権で解散させ、CPP 党首のフンセン首相が事実上の独裁体制を確立させたからである。フンセンがこのような強硬策をとれる背景には、「米欧が求める民主化への反発で足並みを揃え、経済的な結びつきも強める中国の後ろ盾がある」<sup>2)</sup> との見方がもっぱらであった。

カンボジアに対する中国の影響力の大きさに世界が驚いたのが、2012年7月のASEAN外相会議である。ASEANは東南アジア10カ国からなる国際機関で、カンボジアもその一員であり、日常的な会合の他、毎年首脳会議と外相会議が開催される。2012年はカンボジアがASEANの議長国であり、外相会議などのとりまとめを担当していたのである。同年の外相会議の最大の議題は、南シナ海をめぐる中国とベトナムやフィリピンなどのASEANの国の対立の問題であった。2012年4月それまでフィリピンが占拠していた南シナ海のスカボロー礁を中国が力で占拠してしまった。また、中国の石油開発国有企業の中国海洋石油はベトナムの200カイリ内の探査鉱区を入札にかけていた。そのためASEAN外相会議の共同声明案には南シナ海問題がとり上げられていたのであるが、中国は、ASEAN外相会議は「南シナ海問題を話し合うのにふさわしい場」ではないと牽制していた。議長国カンボジアの外相は、「度々共同声明の草稿を持って会議場を出て、姿を見せない助言者に相談しに行っていた」<sup>3)</sup> という。そして、ASEAN外相会議は45年の歴史の中で初めて共同声明を出せずに幕を閉じた。

ASEANは元々10カ国が結束することにより大国に対し発言力を確保してきた組織であるが、カンボジアによりその結束が乱されたのである。カンボジアはASEANの結束を乱してまでなぜ中国に擦り寄るのだろうか？ メディアは、中国の経済支援が功を奏しているから

だと報じているが、それだけの理由で一国の外交政策が決まるのだろうか？ そんな疑問を感じていると飛行機はカンボジアの空港にランディングしたのだった。

## 2. トウクトウクの旅は意外と快適

プノンペンの空港は近代的で綺麗な空港であったが、空港から一歩外に出るといかにも東南アジアらしい景色が広がっていてうれしくなった。空港に着いてまずやらねばならない仕事は、荷物を持ってホテルまでどう行くかということである。普通はタクシーで行くが、カンボジアではトウクトウクという手段がある。トウクトウクとは、オートバイの後に客を載せるための荷台をつけた乗り物でカンボジアではタクシーよりも普及している。普通は4人の客が二人ずつ向かい合って座れるようになっており、屋根はあるが、あとは枠だけである。一見するとみすぼらしいが、乗ってみるとこれがなかなかいい。動き出すと風通しがよいため暑さも気にならず快適だし、速度が遅く窓がないから写真も撮りやすい。もっとも、いいことばかりではない。運ちゃんから交差点で停まった時は持ち物をしっかりと握るよう注意を受けた。荷物をひったくる輩がいるというのである。もうひとつ、あまり速度が出ないから遠距離だとすこぶる時間がかかるのだ。そのため、約束の時間に遅れてしまうこともあった。

さて、こんなトウクトウクで街を眺めると、驚いたことに漢字の看板がやたらと目につく。皆中国系の企業のものだ。プノンペンは建設ラッシュで、大きなビルがいくつも建設中なのだが、建設業者の多くは中国企業だ。カンボジアはやはり中国べったりなのだろうか？



写真2 トウクトウク

### 3. 集中豪雨的な中国の民間投資に危機感

今回のカンボジア訪問の目的は、とにかく現場を見て、多くの人からカンボジアの現状について話を聞くことにあった。大学教員からなる我々一行4名のうちカンボジアに来たことがあるのは2名のみ。私にとってもカンボジアは初の訪問だ。事前のアレンジで困ったのは、意見交換してくれるカンボジア人が見つからないことだった。前述のとおり丁度カンボジアの総選挙直後で、この時期外国人と会うのを避ける傾向があったのかもしれない。幸いカンボジアにある日本大使館の御陰で我々は10名余りのカンボジアの有識者（学者、元政府高官や元政治家等）と意見交換することができた。

彼等が異口同音に話していたのが、中国の集中豪雨的な投資に対する懸念である。中国は数年前から「一帯一路」と呼ばれる経済構想を打ち出して着々と実施しており、日本でも最近メディアで頻繁に報じられるようになっている。もともとは中国から西に向かって、古代シルクロード沿線国（「一帯」）及び海のシルクロードの沿岸国（「一路」）それぞれと中国の経済協力を目指したものであるが、現在では中南米諸国や太平洋島嶼国等も対象国に含まれ、事実上中国の世界経済戦略のようなものになっている。もっとも、国策として進められる一帯一路プロジェクトの中には途上国の実情を無視したものもあり、最近では批判的報道も目立ってきている<sup>4)</sup>。カンボジアは一帯一路の対象国であり、一帯一路がカンボジアでどのように受け止められているかは、我々の関心の一つであった。しかしながら、我々が意見交換した人達が批判していた中国の投資は一帯一路プロジェクトのことではなかった。彼等が批判していたのは、中国の国有企業が推進するような大きなプロジェクトのことではなく、多くの中国人がカンボジアにやってきて行っている中小規模の民間事業のことなのである<sup>5)</sup>。彼等によれば、これらの中小規模の投資の背後には中国マフィアが介在していることも多く、金と欲が支配する世界で、カンボジア経済のみならず社会を変質させてしまっているという。特にカンボジアの港町でリゾート地でもあるシアヌークビルの状況は深刻で、チャイナタウンのようになっているそうだ。後述のとおり彼等の多くはこのような中国の集中豪雨的投資を中和するためにも日本からの一層の投資を望んでいた。

外から見ている我々は中国の一帯一路政策の結果、東南アジアが中国の勢力圏になっているのではないかという点に関心が向きがちであるが、現地で知る実情は無秩序でカオスと言ってもよいような中国の進出であった。

### 4. なぜ米国を捨てて中国に接近するのか

以上の通り、多くの人が中国の集中豪雨的投資に批判的であったが、不思議なことに誰もカンボジアと中国の政治的な関係自体を批判することはなかった。実は、カンボジアに来る前に筆者が抱いていた最大の疑問は、「カンボジアが米国との関係を犠牲にしてまで中国に接近するのはなぜか？」というものであった。前述のとおり、2012年のASEAN外相会議でカンボジアは中国の意を体して行動したため多くの国の輿論を買ったのだが、カンボジア

の中国傾斜はその後も強まる一方で米国との関係は疎遠になるばかりなのである。

日本ではあまり報じられないが、元々カンボジアと米国の関係はかなり緊密であった。実際米国は最近までカンボジアと共同軍事訓練を行ってきたし、軍事援助も行ってきた。さらに言えば、フンセン首相の3人の息子はいずれも米国で教育を受けているのである。つまり、カンボジアは中国とも米国とも良好な関係にあり、どちらか一方を選択する（あるいは、選択せざるを得ない）状況にはないはずである。にもかかわらず、米国を捨て中国をとるとするのはなぜなのか。

私たちが会った有識者の答えはこうだ。第一に、カンボジアの安全保障のためには中国と組まざるを得ない。なぜならば、カンボジアは人口六千数百万人のタイと人口九千数百万人のベトナムに挟まれており両国との間には領土問題等緊張要因を抱えているからである。人口が千数百万人の小国カンボジアとしては安全保障上中国に頼らざるを得ないということなのだ。第二は、カンボジアの内政上の要請だ。野党を解散させるようなカンボジアの現政権のやり方に米国は批判的で様々な圧力をかけるが、結果として政権を中国に接近させてしまうのだという。

この説明は一応もってもらしいのだが、中国一辺倒はやはり危険な選択のように思える。外交の常識からいえば、地域の大国である中国とワールドパワーである米国の両国と良好な関係を維持することこそカンボジアの利益と考えられるのである。タイやフィリピンがやっているように、米中を争わせて双方から支援を引き出すということだって可能であろう。この疑問に対する解答は意外なところにあった。

## 5. ベトナムに対する恐怖

カンボジアの人たちと話を続けるうちに、彼等が驚くほど強い反ベトナム感情を抱いていることに気がついた。しかも、そのような感情は一部のカンボジア人が抱いているのではなく、多くの人々に共有されているようなのだ。これはもちろんカンボジアの歴史に根ざすものであるが、不思議なことに同じ「脅威」であるはずのタイにはベトナムほどの反感を抱いていないようだ。カンボジア人のベトナムに対する恐怖感情は、時にカンボジア領内にいるベトナム人を虐殺するといった事件まで起こすほど強烈である<sup>6)</sup>。このようなベトナムに対する強迫観念ともい



図1 カンボジアと周辺諸国（出典：外務省 HP）

える感情が国民に共有されている中で、ベトナムの向こう側にある大国中国と結ぶのはカンボジアにとってはごく自然のことなのであろう。

また、ベトナムと中国は歴史的に大変仲が悪く、ベトナム戦争では協力したもののベトナム統一後の1979年には戦争（中越戦争）まで起こしている<sup>7)</sup>。「敵の敵は味方」というリアリズム的な観点からも、カンボジアが敵（ベトナム）の敵（中国）を味方にするのは妥当である。丁度、かつてベトナムが中国と対立していたソ連に接近したごとく。

カンボジアの有識者は次のように述べていた。「最近の中国は、二つの要素を利用してカンボジアに影響力を及ぼしている。第一はベトナムに対するカンボジア人の恐怖心であり、第二は中国の資金である。」

## 6. 中国とカンボジアの浅からぬ縁

日本では、カンボジアが中国になびくのは、中国が資金力にものをいわせてカンボジアに多額の支援をしているからだという受け止め方が一般的である<sup>8)</sup>。しかし、これも物事的一面を強調しているに過ぎないということが今回のカンボジア訪問で分かった。

カンボジアの人口の約3割は華人すなわち中国系の国民で、そのうちの100万人は現在も中国人としてのアイデンティティーを保っているといわれているのだ。そのためカンボジアには中国語で授業を行う学校が5つあり、中には一万数千人の華人の子弟が通っている学校もあるそうだ。1,500万人の国民のうち100万人である。また、東南アジアにはよくあることだが、カンボジアの経済はタイクーンと呼ばれるごく少数の大金持ちによって握られており、その多くが華人だという。そして、これまたよくあることだが、タイクーンは政権中枢と緊密な関係を保ち政治的影響力を持っており、中国はこのようなタイクーンを通じてカンボジアの政治に影響力を行使していると主張する人もいる。

中国とカンボジアの関係はこれだけではない。1970年カンボジアの指導者であったシアヌークが外遊中に国内でクーデターが起き帰国できなくなったとき、シアヌークを救ったのは中国であった。中国は北京市内に邸宅を提供しシアヌークを庇護したばかりでなく、シアヌークが政権に復帰した後も同邸宅を提供し続けた。驚くべきことにシアヌーク亡き後もこの邸宅は維持され、現在のシハモニ国王も毎年訪中して同邸宅に滞在しているというのだ<sup>9)</sup>。まさにカンボジアと中国の関係は浅からぬものがある。ちなみにシアヌークを追放したロンノル將軍は親米政権を打ち立てたが、長続きしなかった。どうも米国の旗色は悪い。

では、中国はカンボジアに何を求めているのだろうか？ カンボジアの有識者は、次のようにいう。「第一に、カンボジアが永遠に中国の忠実な友人であること、第二に、中国の投資に開放的であること、これには天然資源に対する投資も含まれる、第三に、いざという時に（2012年の時のように）『切り札』となること。」

## 7. ASEAN の連帯

それでも私にはまだ分からないことがあった。カンボジアもベトナムも ASEAN の一員である。ASEAN は元々共産主義の浸透を防ぐ目的があったが、現在はベトナムやラオスも加盟しており、本来の目的から離れたものの域内の平和と安定に寄与していることは間違いない。ASEAN はそれだけでなく、10 カ国がスクラムを組むことで域外国に対し大きな発言力を持つという外交上のメリットがある。東南アジアには、米国、中国、日本等の大国が影響力を及ぼしている。ASEAN 加盟国が個別に大国に当たっても勝ち目はないが、団結して ASEAN として一つの声で発言すれば事情は異なる。実際今回あったあるカンボジアの有識者は、ASEAN に加盟したことでカンボジアは 10 倍の発言力を得るに至ったと述べている。それなのになぜカンボジアは 2012 年の ASEAN 外相会議の時のように ASEAN の連帯を乱してまで中国の肩を持つのか私には理解できなかったのである。

私の疑問に対するカンボジアの有識者の答えは明快であった。「ASEAN はカンボジアを守ってはくれない」「カンボジアとタイが国境で衝突<sup>10)</sup>したとき、ASEAN は助けてくれたかい?」「カンボジアはいつも ASEAN のスポイラーとして行動しているわけではない。シンガポールだって一本の足は米国に、もう一本の足は中国に入れている。」

なるほど安全保障や国益を考えると ASEAN の連帯を犠牲にすることもあるということなのだ。結局南シナ海問題で対立するベトナムと中国のどちらかを選べといわれたら、ベトナム嫌いのカンボジアは自国を守ってくれない ASEAN との連帯を犠牲にしても中国をとるといふことのようなのである。

## 8. 「カンボジアは民主国家です」—日本とカンボジアの関係

ここまでカンボジアと中国及びベトナムの関係を主に紹介してきたが、日本との関係はどのようなのであろうか？ 実は、日本はカンボジアに大きく貢献してきた国である。かつてカンボジアはポルポト政権の下で百万人以上の国民が虐殺されるという恐怖政治を経験した。その後ベトナムの侵攻によりポルポト政権は崩壊したが、内戦が続き一時期国連による暫定統治を経て総選挙が実施され現在に至るのである。この間、和平交渉に当たって日本はフランスとともに主導的役割を担ったし、国連の暫定統治機関 (UNTAC) の責任者は日本人の国連事務次長明石康だった。和平達成後も日本はカンボジアの国作りを支援し 2010 年に中国に抜かれるまでカンボジアに対する最大の援助国であった。

このような日本の貢献は現在もカンボジア国民に好印象を与えている。前述のように今回意見交換した有識者の多くが、無秩序で腐敗した中国の投資でカンボジアの社会が変質してしまうことを防ぐため日本への強い期待を表明していた。カンボジアには近年日系の病院が進出したり、イオンがショッピングモールをオープンし好評を博しているが、彼等はこのような日本の投資をもっと増やしてほしいと口々に述べていた。また、ある人は、「カンボジアの政治は世代交代の時期に入ってきている」「日本はカンボジアが西側に留まるための最

後の砦である」とまで述べていた。

日本のメディアは7月の総選挙でフンセンが独裁体制を固めたことに対する批判的報道がほとんどで、中にはカンボジアへのODA（政府開発援助）を再考すべきであるとの論調もあるが、上記のようなカンボジアの人々の日本に対する期待を考えると果たしてそれだけでよいのだろうか？ 現代の世界では、強固な民主主義が維持されているのはほとんど先進国のみである（それさえも近年ではポピュリズムやアメリカ・ファースト等により心許なくなってきた）。そのような現実を踏まえた上で少しでも明るい未来＝共生的な世界を築くためには単純な勧善懲悪主義は逆効果になりかねない。在カンボジアの堀之内日本大使は、「カンボジアは民主国家ですよ。少なくとも大陸にある東南アジア諸国の中で1993年以降5年ごとに総選挙をしている国はカンボジアくらいしかないのでから。」と述べていた。確かに、最近のカンボジアの総選挙には失望させられるが、ここで日本がカンボジアへの支援を切れば、カンボジアをいよいよ中国一辺倒に追いやってしまうことは火を見るより明らかだ。それはASEANや日本、そして何よりもカンボジアにとってよいことなのだろうか？ 中長期的な視野を持って外交を進めることが肝要だろう。少なくともカンボジアには日本に大きな期待を寄せている人がいることを忘れてはならない。

## 9. 国と国の共生再考

以上のとおりカンボジアが中国に接近するのは、報じられているような中国の金の力だけではなく、隣国特にベトナムへの抜き難い不信と恐怖心があり、また内政上の要請等々の要因があるということがわかった。そして中国もずっと以前からカンボジアに対し並々ならぬ配慮をしてきた歴史があるのだ。もちろん僅か2、3日の滞在でカンボジアのことが正確に理解できたとはいえないだろうが、現地に行く前にくらべてカンボジアに対する視野がずっと広がったことは確かだ。

それにしても国と国の共生の何と難しいことか。冒頭に記したように昨年のベトナム行きでは大国中国に隣接するベトナムの悲哀を感じたが、今回の旅行では大国ベトナムに隣接するカンボジアの悲哀を感じざるを得なかった。日本も隣国との間に歴史問題や領土問題を抱えている。感情が絡む問題である上に外交的な解決が難しいことから、共生の道を歩むには、最低限指導者が国民のナショナリズムを煽るようなことを控え、地道に交流していくしかないだろう。

## おわりに—カンボジアは美味しい

話は変わるがここで外交機密を一つ披露しよう。かつて外務省で働いていた頃のことである。外交官であるから外国勤務は当然であるが、どこの国に配属になるのかということとは大きな関心事であった。何せ通常は3年程度そこで生活するわけであるから観光旅行に行くのとはわけが違う。特に気になるのは食事である。うまいメシが食える所とそうでない所では、



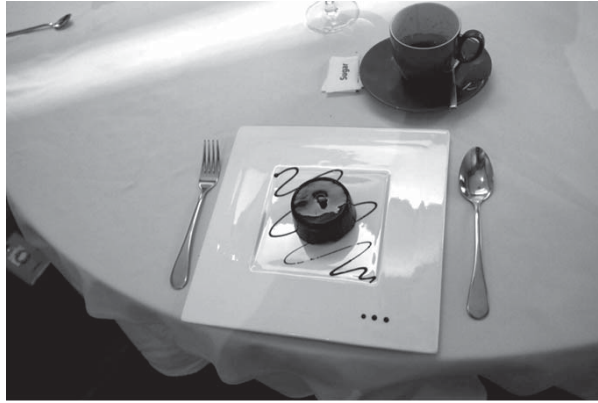


写真3 デザートまでが本格的

生活環境に雲泥の差が出る。当時部内でよくいわれていたのは、かつてフランスの植民地であった国は総じて食事がおいしいということであった。比較の問題であるから、もうひとつの植民地大国が治めていた国と較べてという話である。我が身を振り返ってみると大変残念なことに、フランスの植民地だった国に勤務したことはない。

さて、かつてフランスの植民地であったカンボジアに話を戻すと、今回特に記憶に残ったのが、プノンペンで食したフランス料理だ。喧噪なプノンペンの街中であってそこだけが静穏な空気に包まれている洋館にその店があった。かつては王族の館だったそうで中に入ると個室に分かれていて、それだけでいかにもと思わせる雰囲気がある。我々が注文したのはランチメニューだったのだが、運ばれてくる一つ一つの料理が素晴らしく、デザートまでが本格的である。やはりあの機密情報は事実だったのだと思っていたところ、シェフが挨拶に見えた。何とシェフは日本人だった。シェフの加茂さんはフランス政府から勲章をもらうほどの腕前なのだ。カンボジアと日本、そしてフランス。料理の世界では共生が実現しているようだ。

このレストランを紹介してくれたのは、プノンペン在住の木村文さんだ。木村さんは、かつて筆者がフィリピンのマニラで勤務していた頃、某大手新聞社のマニラ支局長として活躍されていて知り合った方で、その後新聞社を辞めプノンペンに常住して情報誌の編集長を勤めている。現在カンボジアに日本人の特派員はいない。そのためカンボジア関係の記事はバンコクかハノイに駐在する特派員が書いているが、現地に住んでいるわけではないので隔靴搔痒の感は否めない。木村さんは最近朝日新聞のGLOBE誌に時々カンボジアのことを書くようになった。記者としての鋭い視点から捉えた現場感覚溢れる内容は貴重なもので、毎回楽しみにしている。

(後記：今回の旅行費用を負担いただいた学習院東洋文化研究所と、カンボジアでの有識者との意見交換をアレンジいただいた在カンボジア日本大使館にこの場を借りて感謝申し上げ

げたい。)

### 〈注〉

- 1) 詳細は、拙稿『ベトナム・ラオス旅行記－フォーを食べながら考えたこと』、星槎大学紀要第13号(2017年度)参照
- 2) 2018年3月1日付日経新聞「米が支援削減 独裁カンボジア、強まる中国傾斜」
- 3) ビル・ヘイトン著、安原和美訳(2015)『南シナ海』河出書房新社:264-273、特に271
- 4) 中国の融資で建設されたものの返済不能に陥り中国企業が99年租借することになったスリランカのハンバントタ港はその一例である。
- 5) ただし、これらの民間投資が一带一路政策と全く無縁というわけではない。一带一路という国策に乗じる形で民間対外投資が増加している面もあるし、民間投資を一带一路プロジェクトの一部と冠づけることもあるらしい。
- 6) Deth Sok Udom, Sun Suon, Serkan Bulut (2017) “Cambodia’s Foreign Relations in Regional and Global Contexts” Konrad Adenauer Stiftung, 75-76
- 7) 1978年末ベトナムがカンボジアに侵攻し、中国が支持していた民主カンプチア(ポル・ポト政権)を倒したことが中越戦争の主たる原因であった。
- 8) 例えば、「カンボジア選挙、割れる国際支援 関与深める中国、日本は懸念」2018年3月20日付朝日新聞
- 9) この原稿を書いている最中の2018年9月19日には、訪中したシハモニ国王を習近平国家主席夫妻が同邸宅に訪れている。2018年9月20日付人民日報
- 10) カンボジアとタイの国境地帯にあるプレア・ビヒア遺跡を巡り両国間で度々摩擦が生じているが、最近では2011年に武力衝突が起きている。